

棚田学会通信

第13号 2004年6月25日

発行/棚田学会

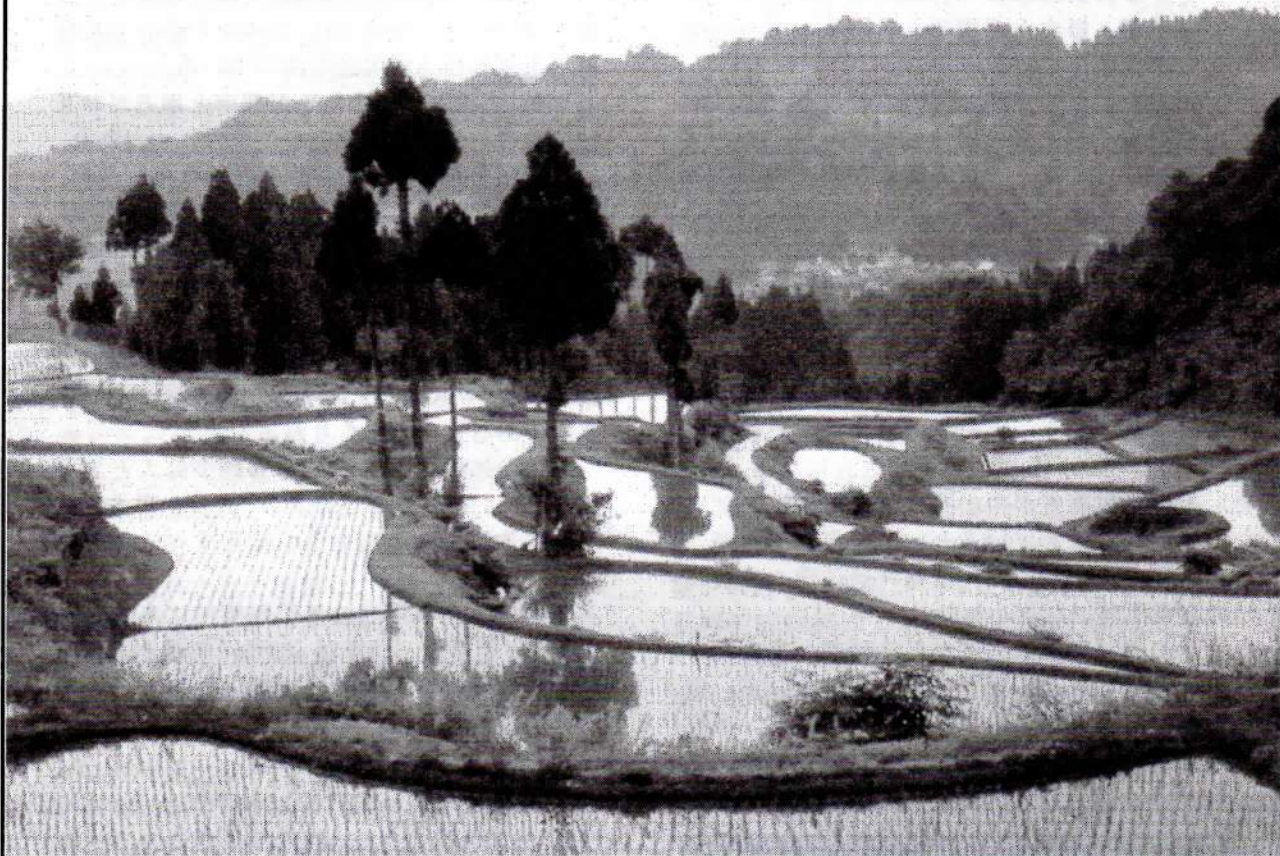
〒184-8577

東京都小金井市本町6-5-3

(ふるさときやらばん内)

TEL:042-381-6721

FAX:042-383-8614



目次

表紙の写真	新潟県松之山町天水越の棚田	1
巻頭言		
棚田再考	新潟県松之山町長・佐藤利幸	2
各地の情報		
宮崎県日之影町戸川の棚田	日之影町企画開発課企画広報係・甲斐康弘	2
土谷棚田の火祭り	長崎県福島町土谷棚田保存会会長・永田 恵	3
水土文化研究会について	農業工学研究所農村計画部集落計画研究室・山下裕作	4
日本の棚田百選の紹介		
都市住民との交流に期待	広島県筒賀村農林課・小笠原文麿	5
現地見学会に参加して		
星野村の棚田はすごい!	兵庫県豊岡農林事務所・矢崎雅則	6
会員報告		
土地利用変化の中での星野村の棚田	東京大学大学院・船引彩子	7
官庁ニュース		
景観法について	農林水産省農村振興局農村整備課総合整備事業推進室長・松原明紀	9
棚田学会事務局報告		
平成16年度棚田学会大会について	棚田学会事務局	10

[巻頭言]

～棚田再考～

新潟県松之山町長

佐藤利幸

現在の棚田ブームは10年ほど前から始まったが、その原点はジョニー・ハイマスさんの写真集「たんぼ」だと思う。

その写真集には日本各地の棚田が紹介されているが、松之山の棚田も芸術品のごとく美しく表現されている。

棚田を耕して生活している者にとっては何かと苦勞する生産の場でしかないが、レンズを通した目で見ると風光明媚な観光地のようにであり、多くのアマチュアカメラマンがその魅力にひかれ当町を訪れている。

松之山の棚田の特徴は地形を巧みに利用した造形美にあるが、その背後にあるブナや杉林とのコントラストも美しい。

日本有数の豪雪地帯である当町の雪消えは4月中旬であり、平野部の農作業と比較すれば約1か月のハンデを背負うことになる。

最近、財務省が中山間地の直接支払い制度の見直しを求めているという記事が出たが、松之山のような山間・豪雪・過疎地では農業の死活問題になりかねない。

都市や平野部の方々からみれば、確かにバラマキ型の制度に感じるかもしれないが、棚田を耕すことは国土の保全につながり、災害の抑制や水循環の安定にも役立っている。

棚田地域のほとんどは高齢化の荒波に直面しており、このまま何もしなければ約10年で耕作面積は半減してしまうだろう。

さらに、地すべり地帯と棚田地域はほぼ一致しており、棚田の荒廃は地すべりを引き起こす原因ともなる。

昭和30年代に始まった高度経済成長は地方から都市への人口流出を招き、減反政策でその動きはいつそう加速され、都市を中心とした経済至上主義社会が現在も続いている。

しかし、徐々にではあるが都市と地方がお互いに共存共栄できる環境が整備されつつあり、棚田に目を向ける都市住民も多くなってきた。

前述のアマチュアカメラマン、棚田オーナー、棚田ネットワークなどのボランティア等、自分でできる範囲で棚田とのかかわりを持ってもらいたい。

棚田には古き良き時代の日本農業が凝縮されており、「八十八」の手がかかる米づくりの基本である人のぬくもりがある。

どんなに技術が進歩しても最後は人と人とのふれあいが一番重要であり、棚田を耕す者にとって本物指向の高まりも歓迎すべきことである。

苦勞に見合うだけの価値が棚田にあるのかどうか、生産者・消費者・政治・行政とも真剣に考えなければならない時期に来ているのかもしれない。

[各地の情報]

宮崎県日之影町戸川の棚田

日之影町企画開発課企画広報係

甲斐康弘

■日本一の石垣の村

宮崎県日之影町戸川地区は、宮崎県の最北山間部に位置し、祖母(ソボ)・傾(カサキ)山系を源流とする日之影川沿いの山あいにひっそりとたたずむ、戸数7戸の静かな集落です。

整然と積まれた石垣が、宅地、耕地、石蔵から防風垣にいたるまで集落全体を形成しており、その美しい石組みから、「石垣の村」とも呼ばれています。

口伝によれば、最古の石垣は嘉永年間(1848～1854)から安政年間(1854～1860)に築かれたともいわれ、集落に住む2名の石工は技術を見込まれ、安政2年(1855)年の大地震で崩れた江戸城の修復工事に召されたといわれます。

また、このとき石垣工法を修得して帰り、集落の石垣を造ったと伝えられています。

最も高い石垣は11メートルにも達し、芸術的ともいえる苔むした石垣のたたずまいに、往事の人々の石工としての素晴らしい感性を思わずにはいられません。

■地域の魅力発信

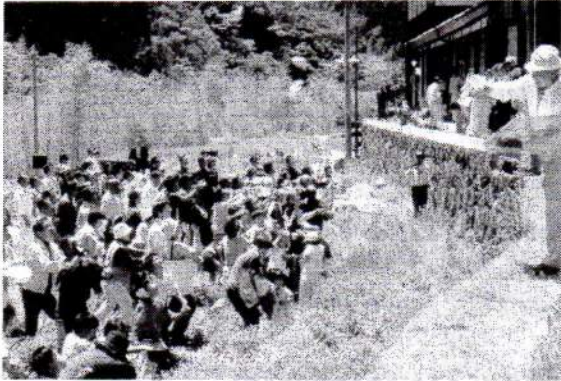
戸川地区では、「日本の棚田百選」の認定を契機に、地区の全7戸で構成する「石垣の村管理組合」を設立し、地域の魅力発信に取り組んでいます。

田植え前の4月末、レンゲやベニバナツメクサが咲きほこる棚田を舞台に、棚田まつりが催されます。神楽の奉納や、地域の青年団が取り組む伝統芸能の披露をはじめ、うなぎの掴み取りや釣り大会、棚田コンサートなど多彩な催しが行われます。

この日に併せて高千穂鉄道と町の観光協会が主催する「トロッコ道ウォーキング大会」が開催されます。これは日之影温泉駅から戸川



神楽の奉納



棚田まつり

地区まで約2時間かけて歩くもので、新緑と川のせせらぎを楽しめるうえ、更に棚田の春も満喫することができることから、毎回多くの参加をいただいております。

■戸川地区の応援団

より多くの方に、地域の良さを認識していただくためには、情報発信が重要です。

このため、平成15年4月、棚田まつりの開催や戸川地区の活性化にご尽力いただいている歌手の金子裕則さんに、戸川地区のPR大使を委嘱いたしました。

戸川地区を応援する「戸川大好き倶楽部」には、金子裕則さんをはじめ、福岡町人会の皆さんにご参加いただき、イベントや情報発信などにご協力をいただいています。

また、宮崎市及び清武町の写真愛好家の皆さんが、戸川の農村風景などを撮影した合同写真展を宮崎市及び日之影町で開催されました。写真展では、高齢者で支える田植えや稲刈りなどの農作業風景、祭事や都市住民との交流、日々の暮らしなど約160点が展示され、古里を守り続けることの大切さなどを広く紹介されました。

さらに、地区に古くから伝わるお盆の風習「精霊棚」の情景を歌にした自主製作CD「戸川哀歌」が発売されるなど、戸川地区の活性化に多大な応援をいただいています。

■今後の展開

棚田は、長い歴史の中で営まれ、築かれて

きた日本の原風景ともいえる農山村の文化、景観を有しています。農山村の豊かな自然、美しい景観、歴史、伝統文化等は、地域の誇りと生活の充実感を感じさせる源泉であり、地域の活性化を進める上での大きな要素です。

このため、地域住民が主体となって、地域固有の財産を見つめ直し、保存・継承していくとともに、都市部との交流による相互補完関係を構築し、新しい感性をもった主体間の交流や人々に体験してもらおう演出、交流人口の拡大の目線で見た新たな事業の取り組みにより、戸川地区の持つ自然や伝統文化の素晴らしさをアピールし、戸川地区の活性化を目指していきたいと思ひます。

土谷棚田の火祭り

長崎県北松浦郡福島町

土谷棚田保存会長 永田 恵

福島町は長崎県の北東部に位置し、伊万里湾の中に浮ぶ面積17平方km、人口約3,400人(世帯数1,150余り)の椿の島です。海岸線はリアス式で入り江が多く、内海には「イロハ島」と呼ばれる大小48の島々が点在し、箱庭を思わせる風光明媚な景勝地です。イロハ島を見下ろす展望所には「海につり 山に耕し 地に掘りて 民のカマドは福々の島」と歌われた歌碑があり、かつての石炭産業が華やかな時代には、山海の幸と地下資源に恵まれた豊かな島だったことがうかがえます。しかし、昭和30年代になると、あちらこちらで鉱害(特に坑道への漏水)が頻発し、多くの湧水は枯渇、島で唯一の溜池も漏水するようになり耕作不能田が続出。33haあった水田も徐々に畑地への転換を余儀なくされ、水田面積は23haまで減少してきました。

このような状況にあっても、土谷棚田がある舞谷地区は、幸いにして湧水が枯渇することもなく、今日まで営々と稲作が続けられてきました。そして、1999年「土谷棚田」が「棚



火祭り

む沖の眺めは抜群で、右手には元寇で名高い鷹島、左手に松浦半島、その間には多くの小島が散らばり、晴れた日にはその奥に平戸・生月の島を望むこともできます。玄界灘に沈む夕日が水面を照らし、オレンジやピンク色に染まる4月末から5月初めが田植えの最盛期。この風景を狙って多くのカメラマンが押し寄せます。今では、九州はもとより関東地方からの訪問者も見られ、ときおり外国人の姿も混じるようになりました。

そのような魅力ある棚田を、どうにかして「村起こし・地域活性化」に繋げられないだろうかということで、地元民が協議・相談を重ねた末に、昨年8月23日、第一回「土谷棚田の火祭り」を開催しました。日が暮れるのを見計らい、打ち上げ花火を合図に、田の畦に立てた1,200本の松明に一斉点火すると、きれいな炎が大小の棚田の輪郭を浮かびあがらせ、7haの水田が一瞬のうちに幻想の世界へ、まるで宇宙にでも迷い込んだかのような錯覚を覚えました。

「拝啓 例年にない冷夏で、また雨の多い夏でした。そんな8月23日の宵のころ、今年は素晴らしい“火祭り”にめぐり合いました。まさに、この世のものとも思えないほど幻想的で、今まで経験したことのない、わが目を疑うほどの感動でした」

これは、火祭りを見てくださった福岡の方からのお便り。

一回目の「火祭り」が予想以上の反響を得たことから、今年は少し規模を大きく（松明を1,600本に）して第二回目の「火祭り」を5月8日に開催しました。その一方、当日予想される観客数は2,000人以上。50戸ほどの小さな地区住民だけでは、人手や資金不足に加え、大イベントに対する不慣れ、観客の安全確保、駐車場の準備など、十分な対策が難しい課題が次々と押し寄せ、産みの苦しみを痛感したのも事実です。

当日はそれに拍車をかけるごとく、点火まで2時間を残し小雨が降り出し、観客もカップを着たり、傘を広げて恨めしく天を仰ぐ始末。午後6時頃になると雨足は更に強まり「このままでは本降りになるのでは・・・」。しかし、明るいうちに点火しても美しくないのでは・・・との思いが交錯し、ぎりぎりの選択で30分早めて「18時30分に点火」と決断。カウントダウンと花火を合図に、待機していた60名の点火者が、狭いあぜ道を小走りに、大小100枚の棚田を瞬く間に紅く染めていきました。暗くなるにしたがって雨も小降りとなり、風にゆれる松明の火が水面に照り映える光景は、昨年とはまた違った趣

を醸し出しました。この頃が最高潮。シャッターが絶え間なく切られ、大きな歓声が方々から起こりました。「昨年は新聞で知り、今年は絶対に見に行こうと決めていた。想像以上の規模と美しさに大満足しています。今後もずっと続けてください」。これは、佐世保から来た女性からの励ましの言葉です。新聞各社は、翌日の一面トップに、この「火祭り」を大きく掲載。

当日の観客2,500名、三脚を据えたカメラマン約400名との集計結果。今さらながら反響の大きさに驚いているところです。

これまでの二回にわたる火祭りの成功は、私たちが誇れる美しい「土谷棚田」を柱にして地域の活性化を図ろうという地元住民の熱意はもとより、町役場、警察、消防、大ぜいのボランティアの方々の支援の集大成であることは言うまでもありません。ここに改めて感謝いたします。

但し、この「火祭り」は私たち地元住民の最終目標ではありません。最終目標はあくまでも、棚田を中心にした土谷地区、更には町全体の活性化です。したがって、夕日に映える棚田のPRも火祭りも、目標に向けた通過点に過ぎません。これから、オーナー制度や棚田米の直販、民泊組織や漁業者との連携の強化、景観の保全など、地域の活性化にふさわしい活動を組み合わせると同時に、地域住民が一致団結して活動に取り組むことが重要となります。今後とも関係各位のご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。また、火祭りの写真をご提供頂いた江口徳郎氏に深謝いたします。

水土文化研究会について

農工研農村計画部集落計画研究室

山下裕作

2004年3月18日、独立行政法人農業工学研究所（茨城県つくば市）大会議室において、「水土文化の地平を展望する」をテーマに水土文化研究会シンポジウムが開催されました。本研究会は（社）農業土木学会水土文化研究部会の主催によるものです。農業土木学会では、棚田に代表される日本農村の美しい環境や景観を、〈水〉と〈土〉と〈人〉が分かちがたく結びついた複合系である「水土」としてとらえ、考究の対象としております。そうしたなかでも、「水土」を作り上げてきた伝統的な技術、ならびにその思想、さらにはその「水土」の維持・管理・運営に伴い伝承される地域固有の社会集団、慣行、儀礼、年中行事、制度等々の歴史・文化的な事象を、

発掘し、正当に評価し、記録・保全し、地域資源としての活用の方向性をさぐることを目的として、2003年度、水土文化研究部会(部会長 佐藤政良筑波大教授)が学会内に設立されました。

このシンポジウムは、部会設立後の第一回目の研究会となったわけであります。したがってパネラーの諸先生には水土文化の実相と、その考察の方法、さらにはその可能性について、様々な観点から幅広く議論して頂きました。川尻先生は「水土文化研究会の設立について」と題され、研究的な視点ばかりではなく、地域で実際に「水土」の維持管理に尽力されている方々や、生活者として農村地域の振興に取り組まれている方々の視点の重要性について強調されました。

小川先生は「水土文化研究のフレームワーク 民俗学の立場から」と題され、歴史文献に見られる「水土」という言葉の考察や、星野村での詳細な現地調査の結果等から、「水土」をめぐる人々(地域の生活者)の多様なまなざし・営為・思想(信仰)についてご紹介頂き、人間との関係性からとらえた時に見える「水土」という世界の豊かさについて論じて頂きました。

また、佐藤先生は「水土文化の原風景」として、江戸時代の農書や着物絵巻等の中に見られる「蛇籠」や「案山子」をもとに、「水土」というものが、単なる生産基盤としてではなく日本人庶民の「暮らし」や「美意識」に深く関与していたことをご紹介頂きました。実際に「蛇籠」と「案山子」を図案化した伊万里焼の大皿を会場にお持ち頂いてのご講演でした。

諸先生の講演の後、コーディネーターの廣瀬伸先生(農林水産省東海農政局整備部次長)の司会により、会場にご参集の出席者皆様と大変有意義な議論の時間を持つことが出来ました。各先生方は、それぞれの分野の第一人者であり、こうした機会を設けることが出来たことだけでも部会設立の意義があったと思われまます。

今後、この水土文化研究部会では、①水土形成に係る技術思想、プロジェクトの評価、②伝統的な施設と技術の評価・保存・活用、③海外を含む広範な情報発信、④「水土文化」とその研究を担う人材の確保、育成、⑤その他「水土文化」研究の継承と発展に関する課題の推進を目的とした諸活動を実施していく予定であります。幅広い分野の皆様のご参加とご協力を切に願う次第であります。

なお、今回本研究会を共催し、また水土文化研究部会事務局が置かれている独立行政

法人農業工学研究所では、こうした「水土文化」等、農業農村の多面的機能、ないし農村の地域資源の評価・保全・活用に関しても重要な研究の柱としております。研究面より農村地域の振興に尽力しております。よろしくお願い致します。

【連絡先】〒305-8609 つくば市観音台2-1-6 (独)農業工学研究所 農村計画部 集落計画研究室(担当:山下)

【日本の棚田百選の紹介】

都市住民との交流に期待

広島県筒賀村農林課主事

小笠原 文麿



「路」(写真コンテスト最優秀賞・鷹取令子) 1, はじめに

ひとつひとつ形や大きさの違う石が丁寧に積み重ねられた石組み、井仁棚田の風景を見ていると、悠久の昔から受け継がれてきた営みと米作りへの情熱が伺い知れる。棚田は、その維持管理のために多くの労力を要する。その条件的、経済的な厳しさをしばし忘れさせてくれるもの、それは棚田を守り続けてきたという誇り、どこにも負けない自慢のお米、そして棚田の美しさだろう。棚田から学ぶ生活の知恵は多い。土地・水の使い方、石垣をつむ技術、共同作業、米作りを優先させた農村技術など—私たちはすばらしい棚田の文化を守り続けたいと思っています。

2, 地区の概要

井仁地区は、筒賀村の中央部から東南へ6km、一般県道上筒賀・筒賀停車場線を九十九曲りに上った場所にあり、太田川(田之尻川)の源流域でもある。地形は東西方向に広がるすり鉢状の傾斜地であり、棚田が広がり民家が点在している。標高は、井仁小学校付近で500mあり、村中心部(筒賀中学校290m)からは約200m高く、高冷地に属する。

集落人口は男性34人、女性41人の75人、平均年齢は59.3歳、高齢化率は54.7%と過疎高齢化が進んでおり、これまでどおりの集



棚田まつり・田植えの様子

落機能の維持は、年々むずかしくなっている。

しかし、県内でも希な個性豊かで美しい景観を誇る棚田集落であり、歴史も古い。集落内の生活環境は、上・下水道共に全戸に普及し、休校中の小学校と村営のプールがあり、神社・仏閣もある。さらに主要幹線の県道も現在改良中である。

この井仁地区は、中山間地域の最上流部に位置し、自然からの圧力と直接対峙していて、下流域の農地に対する緩衝地帯としての役割を果たしており、また厳しい条件の下での農業生産活動を通じて、農山村の原風景の保存など、特有の多目的機能を発揮している棚田地域であり、今日まで継続して国土保全機能を発揮してきた。

平成 11 年度に「日本の棚田百選」に選ばれ、棚田を保全するために集落が一つになった活動を現在展開中である。そのひとつとして、都市住民とのふれあいを通じた棚田地域への関心と交流の振興を図る目的で「井仁棚田まつり」を開催し、田植え歌や苗運び・杵まくりなどの伝統文化の伝承に努めているほか、さんばい（朴の葉で包んだむすび）で参加者をもてなすなど、地域の食文化も伝えている。参加者の中には、消費者団体や棚田保全ネットワーク組織の構成員も多く、今後の井仁棚田地域保全活動への協力を、意欲的に支援していただくと期待している。

3, 都市との交流

村では都市との交流を軸として、地域の活性化を目指している。先ほどの井仁棚田まつりは地元住民とのふれあいができるイベントとして大変好評で、今年で第6回をむかえるが、のべ500人もの都市住民との交流が続いている。同時に棚田写真コンテストも開催しており、昨年は20名37点の応募があった。地元住民の審査によって入賞作品が選ばれ、副賞として井仁でとれたお米が贈られた。地区にとってもパネル展示で地区の紹介ができたり、新しい発見があったりと有意義なものとなっている。

近年、高齢化による意欲の薄れや、マナーリ化を心配しているが、なんとか踏みとどまるためにいろいろと内容も充実させている。「あゝ千枚田～ふるさと遺産～」を歌われる歌手の愛明さんのミニコンサート、棚田を巡るオリエンテーリング、NHKのアナウンサーをお呼びしての座談会などに取組み、楽しんで頂けた。

もうひとつ、忘れてならないのが伝統の継承だ。数少ない若い世代では、手植えや、ハデ干しの経験がないため、地区住民にとっても有意義なまつりとなっている。

また棚田まつりにあわせ開催してきた青空市を発展させ、6月～11月の間、毎週日曜日に市を開いている。今年で3年目だが、高原でとれた野菜はおいしいと固定客も増えつつある。お客さんが喜ばれるのはもちろんだが、農家のお母さんたちの顔がいきいきとして、生きがいに感じておられることは望外の喜びであった。

4, まとめ

このように、広島県で唯一の棚田百選に選ばれたことで先を行く交流を継続し、都市の方に農村の意義を再確認してもらうこと、それが地区のあり方、ひいては日本の農業を考えるいい機会になるのではと期待している。

[現地見学会に参加して]

星野村の棚田はすごい！

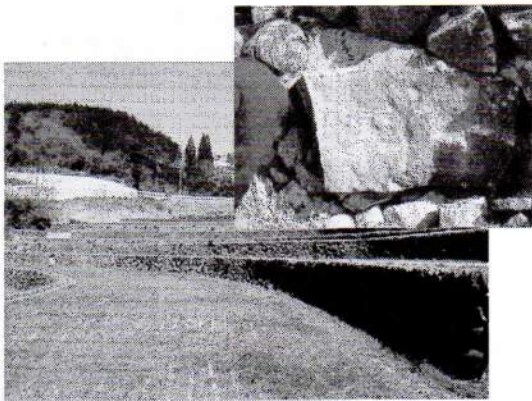
兵庫県豊岡農林事務所

矢崎雅則

福岡県八女郡星野村。生まれが九州なので、小学生の頃一度訪れたことがあった。しかし、その時は天気が悪く、濃いもやの中に茶畑が広がっていたことぐらいしか記憶がなかった。2004年の3月27日・28日。天気は良く、2日とも快晴。私は自分の車でその星野村を棚田学会現地見学会で再び訪れた。

星野村まで来たのだが、村に入った途端、谷を挟んで道路と反対側の山の斜面に棚田が見えた。かなりの急傾斜で、かつ、それがずっと上の方まで続いている。「すげー！」と声をあげてしまったが、一度だけではすまなかった。報告会の会場である総合保健福祉センター「そよかぜ」に着くまで3度ほど叫んでしまった。村全体が棚田である、というのが星野村の第一印象となった。

現地見学会初日はセンターで調査報告が行われた。歴史や民俗、伝承文化と、様々な分野から研究が行われていたが、特に、小字名・棚田の名前と地形・地勢との関係は水田



広内合瀬耳納の棚田石垣
「天保8年」と刻まれた碑文

開発の歴史を紐解くようで非常に興味深かった。谷水の取水口には「井手」の地名が残っていたり、弓なりの棚田が数枚連なっているところは「六丁弓」の田んぼなどである。

私は大学の研究で、棚田百選の兵庫県加美町岩座神の棚田について調査したが、その田んぼにも一枚一枚名前が付いていて、「車の下」という田んぼは、水車（昔はあったが現在は無い）の下の田んぼということをしている。それと全く同じである。

休憩時には”だご汁”をいただいた。懐かしい。小さい頃親が時々作ってくれたものである。だご汁は小麦粉を練った団子（だご）入りの豚汁みたいなもので、団子といっても丸くはなく、引きちぎったようないびつな形をしている。家庭の味とも言える料理で、家庭ごとに異なるのはもちろん、私の親が作ると毎回具材が違っていた。おにぎりも棚田のお米を使ったのであろう、非常に美味しかった。

続いて行われたパネルディスカッションでも非常に興味深い研究が発表された。見た目は不定型な棚田ではあるが、それとは裏腹に非常にシステムティックに配置された水利系統や様々なまんじゅう、だごの文化など、発表を聞いていて感心するとともに、地道な研究を続けた諸先生方、調査研究に全面的に協力したであろう地元星野村の人達に頭の下がる思いであった。

そして夜は、ふるきやらの石塚さんによる毒舌トーク！じゃなかった、ミュージカル&即興ライブ！私はふるきやらのミュージカルを観るのは初めてであったが、農業を題材にしたり、「過疎化・高齢化」などの重いテーマであるにも関わらずその劇が愉快で感動的であることに驚き、感心した。石塚さんの毒舌トークは紙片がないので割愛させていただくが、星野村に対する愛が満ち満ちたものであった。

2日目は棚田の見学。実際に棚田を歩いて

みると、谷底から山の上まで積み上げられ垂直に切り立つ石垣の迫力、営々と数百年刻んできたであろうその歴史に圧倒された。広内地区の棚田石垣には、江戸時代に文字が彫られた石があり、そこには天保の大飢饉のために棚田を開いたことが刻まれていた。このような急傾斜地に棚田を築くのは大変な労力を要したに違いない。ましてや食料の乏しい飢饉の最中にある。お米に対する切実たる思いが伝わってきた。一方、現在の我々は、安易にはないにしろ止むに止まれぬ事情によって、棚田を放棄している。中山間地域の棚田には多面的な機能があるとよく言われるが、そのような理論を抜きにしても、先祖から脈々と受け継がれ、多様な文化を育ててきた棚田を守り続けていくのは当然の使命のように感じる。私は棚田の耕作者ではないし、その苦勞も知らないで、このような強気なことが言えるのかも知れない。しかしながら、微力ではあるが棚田の保全のお手伝いをさせて頂きたいと思い、「棚田守り隊」に参加を申し込んだ。かなりの遠距離ではあるが、頑張って星野村を応援しようと思う。

最後に、今回星野村を訪れた全体的な感想であるが、この報告書を書き終わろうという時に気付いた。棚田調査報告会のレジメに書いてあるではないか。

「星野村の棚田はすごい！」と。

【特別寄稿】

土地利用変化の中での星野村の棚田

東京大学大学院

船引彩子



地すべり地域である鹿里地区の茶畑

1. 星野村との出会い

「棚田に行ってみない？」と東京大学の春山先生に誘われ、福岡県星野村を訪れたのは3年前の8月のことだった。それまで大学の実習などで何度か棚田の村を訪れたこと

はあったが、本格的な調査として棚田の村に足を踏み入れたのはこれが初めてだった。私が主に関わったのは、棚田の存続基盤としての地形と耕作現況を調べるというもので、平成 13 年 8 月から三ヵ年の予定ではじまった文化庁の補助、星野村主催による民俗文化財棚田調査の一環として行われた。

星野村の棚田は美しい日本の村景観コンテストや、棚田百選の認定などでその景観が外部から高く評価されており、村内においても地域の人たちが積極的に保全活動への取り組みをしている。平成 8 年には星野村景観保全



広内地区での石垣の崩壊

検討委員会が発足し、平成 12 年の第 7 回棚田サミットは星野村と隣の浮羽村の合同大会として行われた。棚田の保全運動が高まる一方で、過疎化の進行は止まらず、棚田耕作を支える労働年齢層の人口は今も減りつつある。平地に比べ、労力のかかる棚田は耕作放棄されたり、栽培の容易な花木畑などに転作されたりする水田も少なくない。

2. 棚田の分布は地形に対応しているか？

棚田とその分布地域の地形・地質については、地すべり地形と関連付けて論じられている研究が多い。日本の棚田は特に地すべり地域にあるものが多く、慢性的な地すべり地域の有効な土地利用のひとつとして棚田が活用されている。また、水田耕作にとって必要な水が得られ、通水のためある程度の傾斜を持ち、土の保水性がよいということも棚田が形成されるのに必要な条件としてあげられるだろう。

現在、星野村には棚田が 27 ヶ所あるが、そのうちほとんどの棚田が村の中央部を流れる星野川、もしくは広内川の流域にある。もう少し細かくみると、段丘上に立地するもの、地すべり地形の上に立地するもの、もしくは山麓の緩斜面に立地するものと、その地形環境はさまざまである。

耕作放棄を免れて現役の棚田が残っているのは、人里に近く、道路が整備され農業用トラックなどが入りやすい地域が多いが、棚

田の立地しているそれぞれの地形環境も棚田の分布や耕作現況に少なからず影響を与えている。たとえば、川の両側に発達した段丘上の棚田などはもっとも耕作放棄の少ない例である。これは傾斜が少ない、集落に近い、灌漑水が得やすいなどさまざまな条件が重なっている。地すべり地域や崖錘地域は水はけがよく、茶畑や花木畑への転作が進んでいることが多い。農業用道路の整備されている両側の地域のみ耕作が行われていることもある。谷底平野の棚田は傾斜が急なため、上流域での転作、耕作放棄が多いが灌漑用水の豊富な下流域では現在でも耕作が続いている。

転作作物として多いのは鎌倉時代から栽培されているお茶や、つつじなどの道路植栽用花木などである。星野村の土壌は弱酸性で野菜・園芸栽培には不向きだったこともあり、需要の増えた昭和 40 年ごろから茶畑や花木畑への転作が急速に進んだ。石垣を崩して大規模な圃場整備を行い、水田土壌の表層 20 ~ 30 cm まで弱酸性の阿蘇火山起源の軽石層を客土してつつじなどを植える。新しく建設された道路の近くでは農作業軽トラックが入りやすくなり、どんどん転作が進められた。転作された畑では水はけをよくするために石積みにパイプを通す工夫がなされている。近年では、水田からの転作だけでなく、山頂の侵食平坦面でパイロットファーム式の茶畑が新しく開墾されている。

3. 百選の棚田、広内

星野村を含む中九州は、大分・熊本構造線や耳納断層などの東西に走る構造線によって南北が画されており、山地の尾根や主要な河川はいずれも東西方向に卓越している。星野村の北部に位置する耳納山地、村の中心を流れる星野川と支流の広内川も同様である。東西に走る耳納山地の南側斜面には星野川と広内川に向かって溪流を持つ土石流堆積型の谷底平野がいくつも形成されており、そのうちのひとつである広内の谷は村内でも最も広域に棚田を残している地域である。広内集落から合瀬耳納高原へ向かって標高差 230m もの斜面がくまなく耕作されている。全体で 137 段、425 枚の水田があり、調査を始めたばかりのころは谷の傾斜と標高の高さによく泣かされたものだ。

谷の最上流部は地すべり地形となっており、滑落崖の下から湧き出た湧水は沢から等高線方向の水路へと流され、各々の水田にかけ流灌漑を通じて分配される。谷の中央部を流れる広内沢の流量は中下流では年間を通じて安定しているが、上流地域では地下水が

伏流し、灌漑水量の不足のために水争いが生じたこともあるという。

4. 星野村の棚田、過去、未来

星野村の棚田は弥生時代から耕作が始まり、中世ごろには現在の棚田の原型がほぼ出来上がった。広内地区には天保8年(1837年)の耕作発願碑の石垣が残されており、人々が棚田の開墾とその収穫にかけた執念が感じられる。近年棚田百選にも認定され、全国的にも有名になった広内の棚田だが、村内の他の棚田地域と同様、維持管理に大変な労力がかかるため、すべての棚田がそのまま保存されているわけではない。谷の上流地域では通作が困難なため昭和40年ごろから花木栽培への転作がさかんになった。また、台風などで石垣が崩れたり、新しく建設された農道から離れてしまった水田はそのまま放棄されてしまっている。

私たちが調査を行っていたわずか3年の間にも星野村の棚田景観は少しずつ変化していった。広内の棚田でも所有者の方が農作業中に怪我をして耕作を続けていくことが難しくなり、放棄されてしまった棚田もあった。石垣が壊れ、無機質なコンクリートの壁に変わってしまった棚田もあった。茶畑や花木畑に転作された棚田は、新しい景観として評価されているが、雨が降ったときの土壌流出の問題や雨水の涵養力低下という問題が残されていることも忘れてはならない。

広内地区と同じような地形条件を持つ耳納山地南斜面の谷底平野の棚田でも、谷全体の耕作放棄や転作が進む地域は多い。そんな中でも広内地区の棚田の所有者の中には、全国的にも有名な広内の棚田であるということに誇りを持って農作業を続けておられる方も多かった。大変な労働を伴う棚田の存続は、外部からの評価の高さにも支えられているのではないだろうか。

棚田の耕作放棄は高齢化の進む全国の中山間地域が抱える共通の問題でもある。これら中山間地域における将来の農業継続のためにも、自然資源としての棚田とそれととりまく自然環境の再評価が必要とされているのではないだろうか。

【官庁ニュース】

景観法について

農林水産省農村振興局農村整備課

総合整備事業推進室長 松原明紀

景観法の制定に向けた背景

良好な景観の形成のための取り組みは、これ

まで、地方自治体による条例の制定や地域住民による協定の締結等を中心に進められてきたところです。しかしながら、地方自治体等を中心とした自主的な取り組みだけでは、景観形成に関する国としての基本理念が明らかでない上、法制的な限界も生じているところです。また、平成15年7月に国土交通省が「美しい国づくり政策大綱」を、同年9月に農林水産省が「水とみどりの『美の里』プラン21」を公表するなど、政府としても良好な景観の形成に向けた基本的考え方を明らかにしたところです。

これらの動きをうけ、都市、農山漁村等における良好な景観の形成を図るための総合的な法律として、農林水産省、国土交通省及び環境省の共管で「景観法案」を国会に提出しているところです。(平成16年6月7日現在)

景観法案の内容

景観法案は、

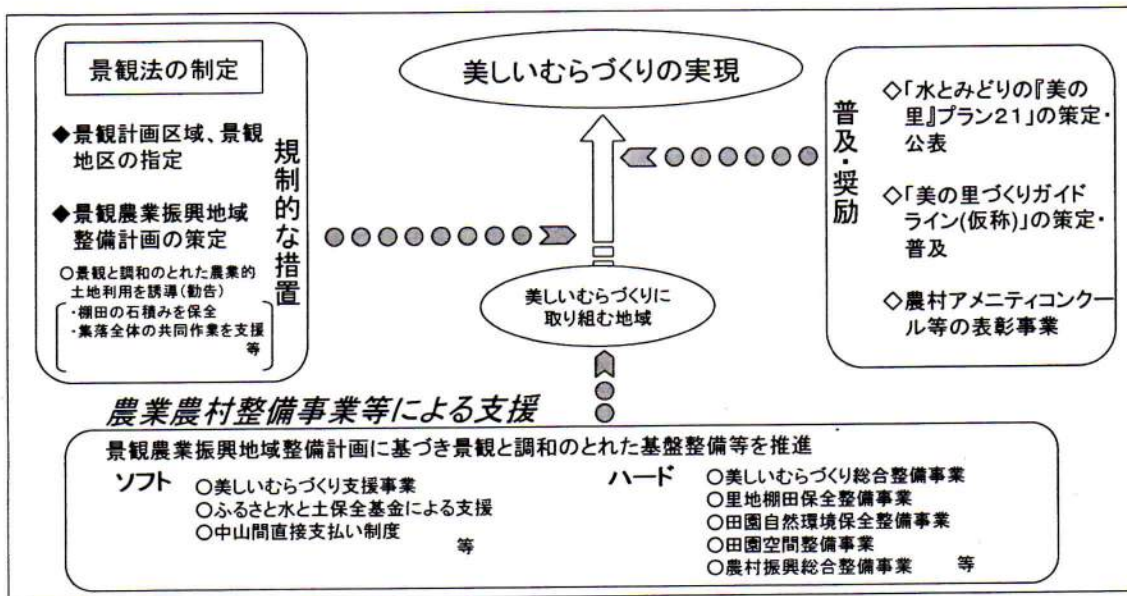
- ① 良好な景観の形成に関する基本理念を定めるとともに、国、地方公共団体、事業者及び住民の責務を定める。
 - ② 都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画を策定し、景観計画区域、景観地区等における行為規制、景観整備機構による良好な景観の形成に関する事業の支援等について定める。
 - ③ 市町村が景観農業振興地域整備計画を策定し、景観と調和のとれた農地の利用への誘導を図るほか、耕作放棄地の発生を抑制するため、景観整備機構が農地の利用権を取得することができるようにする。
- 等の内容を盛り込んでいます。

特に、農山村に特徴的な景観を有する棚田については、その形状や石垣積みを保全するための地域の取り組みを景観農業振興地域整備計画に位置付けることが想定されます。その場合には、景観農業振興地域整備計画に定められた事項に従った利用がなされていないときの勧告、さらに、この勧告が守られないときには景観整備機構の利用権取得も可能な仕組みとしています。

農山漁村の景観の保全に向けての施策

景観法自体は規制措置を中心に定めるものですが、農林水産省としては、普及措置や各種事業による支援措置と組み合わせることにより、農山漁村の景観の維持・保全を総合的に図ることとしています。

(次頁の図参照)



平成 16 年度棚田学会大会について

本年度はシンポジウム、総会、フォーラムを、2 日間にかけて行います。また、初めての試みとして、アジアの方をお招きし、アジアの稲作文化を語り合います。また同時開催の「アジアの原風景・棚田体験展」とあわせ、会員皆様のご参加をお待ちしております。

◆シンポジウム「棚田からアジアが見える」主催：棚田学会

日時) 8 月 10 日(火)13 時～17 時

場所) 早稲田奉仕園小ホール (地下鉄東西線/早稲田駅徒歩 5 分)

- 内容) 1. 第 1 基調講演 春山成子 (棚田学会理事/東京大学)「東南アジアと棚田」
 2. 特別講演 ティエム (ベトナム国立農業科学技術院)「ベトナム北部のライステラス」
 3. 特別報告 安藤和雄 (京都大学東南アジア研究センター)「雲南省紅河州ハニ族の棚田農業」
 4. 第 2 基調講演 海老澤衷 (棚田学会理事/早稲田大学)「傾斜面水田調査の方法と課題」
 5. 研究発表 1 堀 祥岳 (早稲田大学大学院生)「対馬豆殿の水田・畑・木庭」
 6. 研究発表 2 船引彩子 (東京大学大学院生)「福岡県星野村の棚田と地形」
 7. 全体討論 司会：春山・海老澤

◆棚田学会平成 16 年度総会

日時) 8 月 11 日(水)13 時～14 時

場所) 東京日本橋三越本店 7 階・特別食堂「不二の間」

◆国際水田・棚田フォーラム 主催：棚田学会 協力：全国(千枚田)連絡協議会

日時) 8 月 11 日(水)14 時 30 分～17 時 30 分

場所) 東京日本橋三越本店 7 階ギャラリー (地下鉄銀座線・半蔵門線/三越前駅下車)

- 報告) 1. 中国 (雲南省) 張宏臻/Zhang Hongzhen (紅河州梯田申報弁公室副主任・副研究管員)
 李文林/Li Wenlin (哈尼族紅河州元陽県農業局局長)
 2. フィリピン (イフガオ) ジョバンニ・レイエス/Giovanni Reyes (研究者)
 エドワード・A・パンニ/Eduardo A Panni (農民)
 3. ベトナム ティエム (ベトナム国立農業科学技術院)
 他一人 (ベトナム農民協会を通して人選中)
 4. 質疑応答 (コーディネーター：石塚克彦/棚田学会副会長)

◆懇親会 日時：8 月 11 日(水)18 時～20 時 場所：日本橋三越本店 7 階「不二の間」 会費：5 千円

「アジアの原風景・棚田体験展」8 月 10 日(火)～15 日(日) 日本橋三越本店 7 階ギャラリー
 主催：棚田学会 全国棚田(千枚田)連絡協議会 国際コメ年日本委員会 ふるさときゃらばん

巻頭言の新潟県松之山町をはじめとして、全国各地から棚田に対する並々ならぬ思いを込めた文章が寄せられました。また文化庁の「文化的景観」の創設につぎ農水省・国土交通省・環境省共管によって「景観法」の成立が目指されていることは棚田を保全する人たちに勇気を与えるのではないのでしょうか。(中島)